学校教育の在り方

少し前だが、2023 年 11 月 24 日付け静岡新聞の賛否万論で、常葉大学の太田正義准教授（当時、教育心理学）は、「不登校は、学校教育からドロップアウトした子どもの教育を受ける権利が保障されていない問題と言える。子どもの多様性に合わせて学校が変わるべきではないか。」と述べられた。同記事で「児童生徒一人一人に合わせた個別的な対応で自己肯定感を高めていく点は共 通している」フリースクールが、「予定を決めると、それに従っ.て動かなければならないのでストレスになる」からといって、集団生活になじめない子どもの多様性に対応したカリキュラム（？）で教育し、そこで育った子どもたちが集団生活＝社会生活になじめないままで、今の実社会で生活していけるのか、私は甚だ疑問である。

その意味で、学校教育が目指す人間像、社会像が問われている。即ち、学校教育が、本来社会性を持った子どもたちが集団生活になじめないという多様性（？）に対応すべきなのか。あるいは、学校教育が目指すべき「画一化した」人間像、社会像を持つべきではないのか。それとも、学校教育は、本来子どもたちが持っている社会性を育む教育をすべきなのか。私の論は、その最後である。

また、同年 12 月 1 日付け静岡新聞の「一斉教育の限界が来ている」の記事で言われる、集団生活になじめない、集団での生きづらさの心理的原因は、生後から 1 歳半頃の間に親子の間で「基本的信頼感」が欠損したことである（「親から始まるひきこもり回復」舛田智彦著）から、私はその子ども達の社会生活のためには、その改善を図るべきと考え、対応してきた。

記事では「日本は個性重視の教育をうたいながら、実際はそうなっていない」と。確かに。私もホームスクーリングや飛び級、体験学習、個別化教育の制度化が急務と考える。運動会、合唱コンクール、部活動などの集団活動は、社会生活を営む上で必要な「協調性」や「協力」を育み、「公平や平等」ではなく、競う「個人競技・活動」「集団競技・活動」により「自己を錬磨」し、「コミュニケーション能力」が習得される。

学校教育の「一律の教育」や「決まり事」を、「社会生活を営むうえで習得すべき最低の技量」と「社会生活を営む最低のルール」と捉え、改善すべきである。

記事で言われている、「学校生活に不適応を起こす」「大きな集団が苦手でコミュニケーションがうまく取れない」「一斉に何かをすることに気持ちが付いていけない」ことを是認したままでは、子ども達はいつまで経っても社会生活が送れない。

私は 20 歳で起業して以来、子ども達がその社会性故に、同世代の仲間たちと群れ集い、成長する場を実現し、その活動を通じて彼らの社会性を育み、社会的自立を果たすお手伝いをさせて頂いてきた。

特に私達が行う野外活動や交流合宿では、親元を離れ、異年齢の仲間達と群れ集う中で、現在の小社会である縦割りの小さな社会（大学生や大人のリーダーを含む 5,6 人から 12,3 人までの班）を形成し、年下の者は年上の者を敬い、年上の者は年下の者を慈しみ、お互い

をぶっつけ合い、お互いを助け合い、支え合う中で、己を知り、仲間を知り、互いの存在を確認し、群れ集う素晴らしさを体得する。そして、こうした仲間達との真の心の交流を通じて、新たな人間関係を構築し、仲間達との集団行動の中で、自らの自主性と協調性、主体性を育む。それによって不登校やひきこもりは、自然に解消していく。

学習の場でも然り。自立学習、互助学習、探究学習である。主体的授業か、「自立学習」用でもある教科書と副教材で、自分の理解のスピードで、基礎・基本を学ぶ。分からないときは、先生や分かる友達に聞く。図書館を利用するのもいい。分かるまで学ぶ「探究学習」。逆に、分かれば、分からないと聞いてきた友達に教える「互助学習」。東進の「自分も勝って、周りも勝たせる」でもある。インプットが終われば、アウトプットで学力を伸ばす。市の委託事業での学習支援でも示している。具体的な学習は主要 5 教科について、別ページの「静岡オープンスクールの学力観」に示した。そうして野外活動や交流合宿と同様に、学習の場でも、自らの自主性と協調性、主体性を育む。